
鬼の落とした雨

井伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の落とした雨

【Nコード】

N7063U

【作者名】

井伊

【あらすじ】

ある日私は、鬼を見つけました。

現実なんかより愛しくて繊細なそんな鬼の世界が、私の唯一の居場所でした。

雨のよじり

雨が何より嫌いだった。

だけどいつしか嫌いだった雨は大好きな雨になった。

耳のピアスをいじりながら窓の外を眺めていると、蟻のような生徒たちがグラウンドではしゃぎ回る姿が見える。そのまま何も考えずにただ眺める私の視界に、ぼつりと何か空から落ちてきて、軽く目線だけを上に向けると、まるで地を刺すように雨が降り始めていた。

「あ、雨」

心の中で呟いた瞬間に、前の席の女の子が化粧を直しながら同じ台詞を呟く。

「えー雨？ 今から遊びに行くのにー！ 傘持つてる？」
うるさいなあ…そう思いながらちらりと少しだけ目を声のする女の子たちの方に向ける。髪は茶色だったり金色だったりのにきらきらした頭に、負けじときらきらと光るアクセサリー。化粧によって目は大きくて逆に気持ち悪い。そんなに真っ黒にしなくてもいいのに…そう心で思いながら視線がぶつからないようにこっそりと視線を送った。化粧のニオイが気持ち悪くなって、見るもの嫌になって目をそらすものの匂いがまとわりついているみたいで不快だ。

…毎日毎日よくも飽きないな。

クラスの子たちの殆ど、特に傍の女の子たちは授業が終わればすぐに化粧をし始めて、短いスカートをよりいっそう短くする。ブレザーを脱いで校則では禁止されているカーディガンやセーター

を着る。とがった爪はキラキラと石もつけていて、セーターを引っかけてしまいそうだった。

めんどくさいのに、なんでこんなにも頑張れるんだろう。

窓の外に居た生徒たちが、振り落ちてくる雨をさけるようにはしてばらばらと校舎に向かって走って行く姿を見ながら思った。

雨が降るとみんな屋内に籠もる。そんな雨が好きだ。窓から眺める景色が常に静かで、そして不動であればいいのに。

「雨だしカラオケでも行く？」

傍の女の子たちは雨でも忙しそうだけれど……私には見えない場所であるならばどうでもいい。

「大澤タツチ……！」

突然教室に響き渡る声と、ガタガタと音を立てる机と椅子。

何事かと思つて少しだけ音の鳴る方、教室の入口を見た。

「ちくしょー！ 逃げ切れたと思つたのに！」

ばたばたと逃げるように走る男の子に残された大澤が悔しそうに倒れた机を片付けながら叫ぶ。

……何やつているんだろうあの馬鹿は……。

そついで呆れながらその姿を眺めた。きつと目もそう語っていただろう。本当に相変わらず煩い目立つ男。

「大澤ー何やつてるのよー！ 騒ぎすぎ！」

「屋内鬼ごっこー」

隣の女の子の一人がケタケタと大きく口を開けて笑いながら大澤に声を掛けて、それに笑顔で返す大澤。

「あはは、馬鹿じゃん？」

「外雨で出れねーんだもん、体がなまるだろ」

雨なら大人しくしておけばいいのに、なんで鬼ごっこなんか。小学生じゃあるまいし。今時の小学生が鬼ごっこをしているか何て知らないけれど。

私たちの小学生の頃は毎日のように走り回っていた。いや、私はそれを見ていた、だけだったのだけれど。

『待つてよー！』

キリツと胸の奥が音を出して痛む。

「美夏、お前また苦しいのか？」

痛む胸を押さえながらうつむく私に、大澤の声が頭上から降ってくる。

しまった、と思ったけれど……もう手遅れ。見上げると視界には、心配そうな表情の大澤が映し出された。

「大丈夫か？なんか無理したんじゃないか？」

「…何もないよ。無理もしてない」

痛むのは胸の奥。いつもの痛みとは違う痛みだ。この痛みはあんなのせい、と思いつつもそこまで口にしなかった。

出来ることなら大澤とはあまり話したくない。こうやっていつもいつも心配をする大澤を煩わしいとさえ思っている。でもそんなことに大澤は気づきもしないで、私の肩に手を当てて、目線を合わせる様にしゃがみ込んだ。

「大丈夫か、帰るか？ 送ってやるよ」

「大丈夫だから」

お願いだから放っておいて。

私を心配しないで。

心で叫びながら目をそらして、少し曲げていた背を伸ばす。

「なに？美夏とか呼んじゃってー！！もしかして二人付き合ってるの？」

二人の会話に、前の席で集まっていた女の子の一人が私の机に乗る様に覗き込んで来て大声で叫んだ。

ああもつ、だから嫌なんだ。ことある毎にそんな風に言われるのが面倒くさい。今までに何度聞いたかわからない台詞に、心の中で

舌打ちをした。学校が変わるたびに、学年が変わってクラスが変わるたびに、そして大澤に話しかけるたびに聞かれるこの台詞。わからないでもないけれど、いい加減うんざりする台詞。

「あー俺ら小学校から一緒なんだよ」

「えーまじで！？ 意外ー！！」

高校二年になっても、未だ友達の一人もない私と、そして学校中の誰もがきつと知っているであろう、人気者の大澤。この二人に接点があるなんて、自分で考えても意外と思うけれど。

私と大澤の関係に、少し騒がしい教室内から目を背けて窓の外に移した。面倒なこのやり取りはもう聞き飽きていて、勝手にしてほしく思う。

大澤から先に全校生徒に告げておいたらいいのに。でもそうすると自分の存在まで生徒中に広まるのか…それは嫌だ。じゃあもう私に構わなくて居てくれたらいいのに。それで何事もなく終わるんだから。

「でもなんか二人仲良さげじゃない？ 大澤、心配なんかしちゃってー」

「ああ、こいつ体弱いんだよ。ちょっと走っただけで倒れるからな……。昔から俺らのせいで何度救急車呼んだか」

大澤の言葉をかき消すように、ガタツとわざと大きな音を出して立ち上がった。その反動で、椅子が床にさらに大きな音を出して落ちる。

「美夏？」

呼びかける大澤にじろつと無言で睨み、机にかけてあった鞆を奪い取りドアの方に向かって歩いた。

「美夏！？ おい、なんか気分悪いのか？ 大丈夫か？」

「煩い煩い煩い。」

自分の事を他人にべらべらと話される不快感。引き止める大澤の声に振り向くことも足を止めることもなく、ただドアに一直線に向かって歩く。何を勝手に人のことをあんたが話すんだ。

「何？ こわ……」

「教室でも何も話さないもんね、彼女……」

小さな声が微かに耳に入って、ギリ、と唇をきつく噛んだ。

「美夏は人見知りなだけなんだって」

大澤の最後のフォローが耳に入ると同時に、ドアを勢いよく閉めて、何も耳には入らない様に遮断した。大澤のフォローが余計にうつとつしい。

あんたが何も言わなければ何もなく過ごせるのに。

廊下の窓から見える雨が、さらさらと音を鳴らしながらノイズがかかったような景色にしてくれる。

雨が好き。誰も彼もを閉じ込めるから。

雨が好き。汚い世界を洗い流してくれるから。

雨のように、何もかもを流せばいいのに。

まだ下校時間になっていない帰り道には、邪魔な人は誰もいなくて、道に私の緑の傘だけがゆらゆらと動く。

たまに通り過ぎる子供たちが「帰ってゲームしよーぜ」と言いながら走る。

私が幼い頃はゲームなんかしなかったから、雨が降れば家の中で一人きりで、昔はそれが悲しかった。

でも雨の日、外に出ることが出来ず家に籠もっていることより、晴れている日に一人で屋内にいるのが一番悲しかった。

幼い頃から体が弱くて、少し走るだけで発作を起こすこの体が何よりも嫌い。

「また倒れたの？」

倒れるたびに、友達が困った声でそう言っていたのを薄れる意識の中で何度も何度も聞いた。走り回る友達を窓から何度見つめただらう。

「くだらない」

「ばしゃつとワザと水たまりに足を突っ込んで記憶に残る幼い自分をかき消した。」

もつあんなのは過去のこと。今の私には何も関係ない。

ポケットにある携帯電話が軽く震えて思わず眉間にしわを寄せた。自慢じゃないけど友達のいない私の無意味な携帯電話には滅多なことでも動くことはない。両親からの緊急連絡か、もしくは……。

『帰り道で倒れるなよ。しんどかったら連絡しろよ?』

無理矢理アドレスを聞き出した大澤だけだ。

予想通りに届いた大澤からの心配のメールを見て「はあ」とため息を漏らした。そのまま返信もせずに電話を閉じてもう鳴っても気づかないように鞆の奥底に沈めた。

「ほんつとお節介」

友達なんて面倒。

嫌われたって怖がられてもその方が気楽なのに、いつも大澤は私を心配して話しかけてくるし、体調を気遣う。それが何より嫌だと思っていることに何で気づかないのか不思議で仕方ない。自分で思うほどには態度に表しているのに。

ため息をついてうつむくと、何となく傘を持つ自分の爪が目に入った。

マニキュアなんか塗っていない普通の爪は、邪魔にならない程度の長さ。

クラス的女子たちはよくあんなに長く、そしてキラキラとした爪でいろんな事が出来るんだろうかと思う。あの爪でペンを持って文字を書くなんて私には出来そうにない。

「器用なもんだね」

髪の毛も丁寧にくるくる巻いてセットしたり、化粧で自分の顔を彩るのも。私はこのショートボブの寝癖を直すだけで精一杯。

みんな器用だ。みんな色んな事を器用にこなす。私と違って。

「雨だ！雨だ雨だ雨だ！」

突然背後から男とも女とも言えないような声が聞こえて、勢いよく振り返った。

「…え？」

だけど振り返ったそこには誰一人としていなく、私一人。

聞き間違いかと思いたくとも間違いなく聞こえた声と、未だ聞こえる足音。

バシャバシャと、周りを駆ける様な音が私の周りに鳴り響く。姿は何も…見えないのに。

周りを目だけで探るように見渡しながら、体中の血液がどくどくと音を鳴らしながら流れるのを感じた。

「捕まるぞ！ 逃げろ！！！」

また背後から聞こえる声に、今度は何も見逃さないように瞬時に振り返った。

……誰っ！？

嘘のように

「来たぞ来たぞー鬼が来たぞー」

「逃げる逃げるー」

信じられない光景。鬼だ。小さい赤や青に見える鬼が五人ほど、子供のように走り回っている。

手のひらにのるほどの小さな鬼たちだ……。というか鬼で合っているのかもわからないけれど……。

子供のように笑いながらはしゃぎ回るそれらをただ見つめることしかできなかった。一步でも足を踏み出せば、踏みつけてしまいそう。それらはすぐ傍にいる私に気づいていないのか興味がないのか、気にする素振りなく駆け回る。

何だろうコレは。夢でも見ているのか、錯覚なのか。

「行くぞー行くぞー」

そう言って一人、と呼ぶべきかわからないけれど、それが道の脇の草むらに入っていくと、残りのそれらもはしゃぎながら後に続くようにして入っていった。

「待つ……！」

バサツと傘を落とす音が聞こえたけれど、そんなこと気にしていられなかった。

行ってしまっ！

思わず後を追いかける草むらへと飛び込んだ。

何で追いかけるんだらう。

何があるかわからないのに。

何者かもわからないのに。

けどどはしゃぐそれらは自分には無害なんじゃないかという気がするんだ。

何の根拠もないけれど。追いかけて何がしたいのかもわからないけれど、今追いかけないといけない気がして…雨に打たれるのも気にしないで自分の背丈ほどもある草むらの中に足を踏み入れた。少し前を走る鬼たちを見失わないように、走る。そう言えばこんなにも必死に走るのは久しぶりかもしれない。

『待つてよ、待つて!』

昔を思い出して一気に胸が圧迫される感覚に襲われる。胸元をぎゅっと掴み、霞む視界の中で、それでもなお追いかけた。

行かないで。

置いて行かないで。

こんな事で倒れたりほしくないから。

「はっはっ……は……」

やばい、絶対にまずい。そんな危険が徐々にふくれあがった。

かといって立ち止まってしまえばあの鬼たちを見失って仕舞う…

…。

徐々に感じる息苦しさに耐えながら、出来るだけ前を向いて、立ち止まってしまわないように足を動かした。

どこまで行くんだろう。

ちいさなそれらは声を出しながら、時々笑いながら奥へと進む。

心なしかさつきよりも大きくなってないだろうか？息苦しさをせい？

大きな草をかき分けると勢いよく戻って来た草木にぱしつと顔を叩かれた。大粒になってきた雨に負けじと、水分を含んで重たくなつた服を引きずるような気持ちで足を前に。

足下はもう泥だらけだ。手だつて草で何度も切つた。髪の毛はべとべとで、帰つたらお母さんはきつと驚いて怒るだらうな。

走つて倒れるたびにお母さんは心配そうな表情で怒り、そしていつも倒れた後、大澤は必ず家に見舞いに来た。

何でなんだらう。

お節介なのは昔からだ。きつと今日倒れたら、また大澤は見舞いに来るんだらう。

何でそんなにも私を気にかけるのか。そんなに暇なら沢山いるだらう友達と遊びに行けばいいのにといつも思う。

追いかけてながら、目は常に彼らを視界に捕らえているのに頭に浮かぶことは全く関係のないどうでも良いことばかり。

「はっ……はあ……はあ」

そして気づく。胸の圧迫感が薄れていることに。おかしい……さっきまでの胸の圧迫感が殆どなくなっている。何で？

「はっは……は……」

走っているのだから当然息は乱れているものの息苦しさが無い。

苦しくない。こんなにも走っているのに全然しんどくならない。

「雨だぞー雨だ」

目の前を子供のようにはしゃぎながら走る鬼たちを追いかける自分。何だらうかこの感じ。不思議な感覚。視界がなんだか明るくなるような、そんな気がした。

楽しい……！

こんなに長いこと走つたことがあつただらうか。物心ついたときからすでに長く走つた記憶なんかなく、走りたくて走りたくて我慢できずに走れば毎回倒れて親に怒られていた。

楽しくて思わず笑顔がこぼれてしまう。まだまだ走っていたい。

追いかけてたい。追いかけてどうしたいのかはわからないけれど……追いつきたい！

『鬼さんこーちら』

懐かしい声が聞こえる。気のせいだとわかっているのに、それが嬉しい。

追いかけるから、待ってて。

ばしゃつと夢中で走っていたからか、目の前の水たまりに気づかず足をはまらせた。

すぐ走り抜けたけれど、通り過ぎた水たまりを振り返って見ると、思った以上に大きい。

雨はそんなにひどくないのに。

ぱらぱらと降り続けてはいるけれど、あんなにも大きな水たまりが出来るとは思えない。

首をかしげながら走り続けると、妙な違和感を抱いた。

何かがおかしい気がする。大きな葉を避けながら注意深く鬼や周りを見ながら進む。何かおかしいのだろう。

大きな水たまり。

大きな葉っぱ。

大きな大きな、雨。

何かが変わりそうになった瞬間、鬼たちが目の前に居るのに気づき、すぐそば、触れられる場所にいる一匹の鬼と目があって……。

…鬼！

思わず手を伸ばしてしまった。

「なんだお前！！」

鬼の声に顔を上げると、目の前に鬼の顔。テレビや漫画で見るような怖い顔をしていないけれど、人とは違って肌色じゃない肌。真っ赤、といってもきれいな赤じゃないけど。

額から二本の黄色い角が少しだけ出てて、目は白目のない真っ黒な目。まるで動物の目みたい。

「離せよ！何者だ！！」

「なんだなんだ！！」

目の前で驚きを露わにする鬼と、周りから聞こえる声にはつと気づき、自分の手を見ると……。しっかりと目の前の鬼の服を掴んでいた。

黒い着物のような服の裾を。

「あ、ごめ……」

ぱつと手を離すと、目の前の鬼もぱつと警戒するように離れた。

ゆっくりと周りを見渡すと同じような鬼たちが私を取り囲んでいる。

赤だったり、青だったり、黒だったり、黒だっりの鬼たち。カラフルとは言い難いくすんだ色。そしてやっと気づいた。さっきから抱いていた違和感の正体。

小さかったはずの鬼たちは、私と同じくらい。

いつからだろう……。？少しずつ小さくなったのか、なんで気づかなかつたのだろう。そんなにも走ることにそんなに夢中になっていたの？こんなことにすら気づかないなんて。

「あ、えと……」

周りを囲む鬼たちに不思議と恐怖は感じなかったけれど、明らかに不審がつているのは感じてなんと言おうかと考えながら、理解できないことだらけの現状に頭をフル回転させた。

目が泳ぐ、その中に映る風景はどれも大きかった。

私を包めそうなくらい大きな緑色の葉には、頭上に落ちてきたらケガをしてしまうのではないかと思うほどの大きな水。

鬼が大きくなったんじゃない……。私が……。私が小さくなったんだ。

「な、んで……」

自分が小さくなったのかも知れない、そう思いつつもそれでもまだ心の方が追いつかなかつた。

自分の体を何度も見て、何度も周りを見渡す。

だってそんなはずない。そんなことあるはずない。

「お前、何者だ！ 変な服を着て……！！！」

何も言い出さない私にしびれをきらした鬼たちがどこからか、自分の体よりも大きな金棒を手にして威嚇するように目の前に突き出した。

「え、ちょ……ちょっと待って！」

「何だお前は」

えーっと……えーっと……今置かれている状況を理解してどうにかしなくちゃ、と思った。

さすがに金棒を取り出されて、下手なことを言えば殴られかねない状況だ。

殴られたらどうなるのか。さすがにこんなもので殴られるなんて大きな金棒からはいくつもの突起が出ていて見るだけでも痛そう。想像するだけで血の気が引いてしまう。

「私、も、実は鬼なの！」

できた答えはこんな言葉だった。

何だ鬼って……どう見たって違うじゃないかと思わず自分で突っ込んだ。もう少しマシな言い訳はなかったのかと。

考えても出ては来ないのだけれど。

服装は制服で、髪の毛のない鬼と、肩まである髪の毛の私。肌だつて肌色だ。

「どこかがだ！ お前、俺たちと違うじゃないか！ 違う！」

まあ、そうだよね……

自分でも馬鹿だと思ふ言葉に、鬼の反応も納得だ。

ただどこで引き下がるわけにはいかない。どうしていいかわからない状況ではあるけれど、とりあえず怒らしてしまうことはさけないのだから「嘘です」とも言えるはずなく……とつさに嘘に嘘を重ねた。

「その、えと、そう！ 人間と、鬼の間に産まれたの！」

「ニンゲン？」

どうやら何か興味を感じてくれたみたいだ。金棒が少しだけ下がる。ここがチャンスだ！そう感じて思いつくままに言葉を発した。

「私、人間のお母さんと、鬼のお父さんの子供で……だからかちよつと人間となじめなくて……逃げて来たの。そしたらあなたたちを見かけて、仲間だと思って走って来てしまったのだけど……」

鬼たちは私の言葉に周りの鬼たちとこそこそ話をし始める。

「ニンゲンってどんなだ？　どんなだ？」

興味をあらわにした表情をし始めて、とうとう金棒をすつとどこかに直した。

背丈ほどもある金棒をいつたどこに直しているのか気になりつつも、とりあえずせっかく興味を抱いてくれたのだから話さないと、またいつ金棒を取り出すかわからない。

ニンゲンというものを鬼たちは知らない、話だけは聞いたことがあると口々に言った。私の体をじろじろと眺めながら「お前みたいなのがニンゲンなのか」と相談しているのか私に言っているのか分からないけれどその言葉に刻々と頷いた。

私の周りをおんなにも近くで走り回っていたのに鬼には見えないなんて不思議。なんで私には見えたんだろう……人間になじめない私だから？

「ニンゲンは……好きじゃない。ニンゲンはみんな一緒に行動して……人を妬むし憎むし、そして殺し合ったり……」

「殺し合うのか！　なんでだ！　なんでだ！」

自分の声に耳を傾けてくれる鬼たちに、嬉しさを感じた。

あんな大嫌いな、あんな醜い世界なんか大嫌い。みんな醜い。人のこのを気にして、人の目を気にして、自分のことばかりを考える人たち。

「あんな場所に居たくない……」

吐き出す様に口にした。なんでそんなにも嫌いなのか、自分でも

わからない。口に出して初めてわかった。そんなにも嫌っていた世界にいたことを。

「私はどこにも入れないんだもの……」

思わずポロつと涙がこぼれて、慌てて涙を拭いた。

何を泣いているんだろう。口からでまかせを言っていただけなのにいつの間にか自分の想いを吐き出してしまったことに泣いて初めて恥ずかしさを感じる。

「ここに居ればいいじゃないか！」

「そうだ！ お前俺たちの仲間なんだろう！」

鬼の声に思わず見上げると、鬼たちは真つ黒な瞳を線の様に細くして、微笑んでいる。私にまっすぐに手を差し伸べながら。

「え……？」

「半分だろうと鬼なんだ！ そんなひどい世界ならここで一緒に暮らせばいい！」

「お前は仲間だ！」

口々に発せられる言葉に、もう涙を止めることができなくて、ぼろぼろと涙を落とした。

差し伸べられたては真つ赤で、長い爪。

その手をしっかりと両手で受け止めて、涙を流しながら「うん」と大きな声と大きな笑顔で答えた。

雨は上がったようで、空が葉の雫に反射した光によってきらきらとまぶしく見えた。

大きな葉っぱは空を隠しつつも、隙間から覗き込むような空は、今まで見たどんな空よりも高く、青く見えた。なんとなく、懐かしい気もしたけれど、だけど…暖かい鬼たちを見ていると、そんな記憶どうでもいいものに思えた。

遊ぼう、一緒に。

夢のよじり

「帰るのか？　なんでだ？」

あれから何時間が経っただろう。

あたりはもう真つ暗で、制服は駆け回って泥だらけ。

鬼ごっこを何時間続けても息苦しくない体が嬉しくて仕方がない。追いかけて、追いかけても一緒に逃げ回る鬼たち。追いかけて来たら必死で逃げる自分。一緒に遊べることの楽しさ。まるで自分は本当に鬼の子なんじゃないかと思うほど。

だけどそろそろ帰らなければ……お母さんが心配する。

「ここにいたいけど……お母さんが心配するから……」

ここにいたい。その気持ちに嘘はない。できればずっとここで遊んでいたい。子供の様に。

だけでもしこのままここに居たらお母さんはきつと必死に探すだろう。もちろんお父さんも。

小さい頃から心配ばかりかけているのに……もう心配なんかかけたくない。

泣きそうな顔をして私を抱きしめるお母さんを思い出すだけで、自分がとても悪いことをしているような気になった。

「お母さんに話をして、わかってもらえたらここに……一緒にいてもいい？」

「もちろんだ！　もちろんだ！」

その返事が嬉しい。なんて優しい鬼なんだろう。世間でいわれている鬼のイメージなんて本当にくだらない。

「また明日も来てもいい？」

「もちろんだ！　もちろんだ！」

鬼たちはまた目を細めながらそう言った。

このまま帰れないかもしれないそんな不安はあるのに……なのに鬼たちを見ているとそんなこと気にならない。帰れなかったらまた

ここに戻ってくればいい。きつとまた会える。そんな自信があった。

だって私たち仲間に、友達になっただもの

手を振りながら走って行く私に、鬼たちも必死で手を振った。心配そうにしている鬼も居る。

なんて、なんて素敵な仲間だろうか。

なんてきれいな世界だろうか。

見るからに違う姿の私を、すんなりと受け止めてなおかつ別れを惜しんでくれる心優しい鬼たち。前を向いて走りながら自然と頬が緩む。

「はっ……は……は……」

だけどそんな気分も数分後には一気に消え失せた。

周りの景色は次第にどこかで見たことのある景色に……。

小さな葉たちに囲まれて、走れば走るほどに息苦しくなる。口がもう閉じることを拒否して、のどがつかまっているかのようだ。息苦しきで視界もぼやけ初めて歪んだ世界が映し出される。

さっきまで、ついさっきまできれいな世界が広がっていたのに、今は目も開けたくないほどの世界だ。

これだから嫌だ。

この世界のせいだ。

だって鬼たちのそばではいつまでだって走れたのに。

今すぐここで腰を下ろしてしまいたい。このままここで野垂れ死んでしまったらどうしようかと思う気持ちがあるとか足を前に動かしてはいたものの、このまま帰れなかったらどうしようかと、このまま帰れず、鬼の元にも帰れなかったら……やっぱり戻ってくるんじゃないかったとそう思い始めて来たとき、やっと目の前の草が開けて来た。

がさつと倒れ込む様にして草の道を抜けるとそこには見覚えのある道。

近くに見覚えのある緑の傘が転がっていた。

……よかった……かすむ視界にはさつきまでのきれいな世界でない、見慣れたくすんだ世界。愛はないけどやっぱり見慣れているからかほつとする。もう力も入らない体を、必死に必死に動かす。こんなところで倒れるわけにはいかない。

早めに走るのをやめたおかげか、少し休んだらなんとかなりそうな気がして、震える足を必死に押さえながら傘の元まで歩いた。

「美夏!？」

聞き覚えのある声に、ゆっくりと振り返ると案の定そこには大澤が驚いた表情。

……運が悪い。

心の中で舌打ちをしてすぐ自分の傘に目をやって手を伸ばした。その傘は走って来た大澤に寄って軽く持ち上げられたのだけれど……

「お前! なんだその格好!! 走ったのか? ふらふらじゃねえか」

「大丈夫だから……大声出さないで」

大澤の居る方の耳を軽く手で押さえながら、まだかすんだ視界の中で大澤を睨んだ。

「大丈夫ってお前……また倒れたらどうするんだよ……」

なんでそんなに心配をあらわにするんだろう。だけどそんなに心配させてしまうと少し、悪い気になる。だから私は大澤を突き放すことができないんだ。

ゆっくりとあたりを見渡して、見慣れた世界に安堵するけれど……だけどここの世界とさつきまで自分が居た世界の違いに、寂しさを感じた。

あの場所ですつと過ごせたらいいのに。

そう思わずにはいられない。

まだ少し息苦しさが残る中で、そう思い大澤が差し出した傘を何も言わずに受け取った。

歩き始める私に大澤がついてくるのを感じながらも何も言葉を発せず、私たちはすこし距離をあけてただ、無言で歩く。

「はよー」

教室に入ると大きな声が聞こえてくる。それは決して自分に言われた言葉ではないけれど、少しだけその声のする方向を見て自分の席まで向かった。

鞆は昨日洗ったけれどやっぱり少し泥が残っていて、制服も所々に泥の跳ねた後がとれなかった。

お母さん心配してたなあ。

泥をこすりながら昨日のことを思い出す。

帰った頃には既に息苦しさは残っていなかったけれど、見るからに『何かがあった』格好にお母さんはいつものようにあわてて心配した。

今にも泣きそうな顔で……私を抱きしめた。

心配をかけたのは悪いと思う。だけど教室の騒がしい中で一人ぼんやりと眺めているとやっぱり思ってしまう。

あの場所に、ずっといたい。

煩い教室。

煩いクラスメイト。

煩わしい体。

憎らしい世間。

仲間だと呼んでくれたあの鬼たちのそばで、一緒に笑い、周りの景色に感動を重ね、手を取り合って駆けていたい。

「ねえねえ、美夏ちゃんって、本当に大澤とは何も無いの？」

空を眺めていた私に、突然呼ばれた声。ぴくっと体を震わせて振り返ると、机の前の席に座る女の子が私の机に乗りだしながら目を

輝かせていた。

「……なにもないけど」

こんな風に話しかけられるのはいつぶりだろう。どんな顔をしたらいいんだろう…話の内容が若干気に入らないけど。

「昨日みちゃった！大澤と歩いてたでしょ？」

昨日あんな風に怒っていたけどやっぱり仲いいんだよねー」

煩わしい話に、思わず顔が引きつったように思う。

「何何？何の話？」

女の子の言葉を何も言わずに聞いていると、そばから別の女の子が楽しそうに入って来た。机の上に置かれた手に目をやると、真っ赤な長い爪をしている。昨日の鬼の爪のこんな爪だった。だけど…

… この爪の方が痛そうだ。

尖った爪は真っ赤にコーティングされていて、薬指だけに白いストーンが飾られている。

握ったら手に食い込んで来そうな爪。昨日の鬼たちの爪は何も痛くなかったし、むしろ優しく包んでくれたのに。

「昨日大澤と泥だらけで歩いていたらさー」

「マジで！？ 押し倒されたとか？ あはは！ やるじゃん大澤ー」
けたけたと笑う女の子たちの会話に、思わず顔をしかめる。うつむいていたから多分その表情は女の子たちには見えなかっただろうけれど。

馬鹿じゃないの？ なんでこんなことばかり考えてしまうんだろう。男とか女とか煩わしい。昔は一緒になって遊んでいたのに、この年になれば付き合っているだの好きだの嫌いだの、そればかりのクラスメイト。

そんなものくだらない。

そんな気持ちはわからない。

いつからそんなことばかり考える様になるのか、自分もそうなってしまうのかと思うと虫酸が走る。

早く鬼たちのところに行きたい。

行けるのかどうかはわからないけれど、ただ学校が終わればすぐにあの道に入るう。

もう二度と戻って来れなくても構わないとさえ思える。こんな煩いところで息をする方が苦痛。

まだぱらぱらと雨が降り注ぐ今日も校内を駆け回る大澤の姿を見かけた。

横を通るたびに「一緒にするか？」そう言う大澤にいらだちを感じながら無言で通り過ぎた。

そして、少し後ろを振り返り鬼ごっこをする姿を見つめた。走り回る大澤の後ろ姿。一緒に遊ぶ男の子や女の子の後ろ姿。今まで何度見ただろう。何年経っても変わらない姿。

いつも見ているのは背中。

昨日の道まで、無理しない程度に急いでやって来て、きゅっと唇を閉じた。

運動をしたわけでもないのに胸が苦しい。なんでこれほどまでに緊張するんだらう……。

すつと落ち着くために大きく深呼吸をした。まだ雨は降っている。だけど緑色の傘をゆっくりと閉じて、道の邪魔にならないところにそつと置いた。

お願い。

鬼たちの、仲間の元に連れて行ってほしい。一緒に駆け回り、笑いたい。

祈る気持ちで目を閉じて……そして目を大きく開き、昨日入った草むらの中に踏み込んだ。

草はまだぬれていて地面もぬかるんでいる。走る必要は全くないのになぜか走った。

走らずにはいられない。次第に、本当に少しずつだけ大きくなる草。私の背丈ほどの草むらは気づけば身長の数倍ほどになった。

あたりをきよるきよると見渡しながら、昨日の景色に近づいて行く様子に自然と笑顔になる。きつと会えるという確信。全力疾走しても苦しくならない体の軽さ。

「お前！ お前！」

ぱつと草むらから視界が開けた瞬間に、すぐそばで昨日聞いた不思議な声が投げつけられた。幾人もの鬼たちが私を指差しながら嬉しそうにくるくると周りを駆ける。

「来たのか！ 戻って来たのか！」

「よかった！ 遊ぼう！ 遊ぼう！」

自分を待っていてくれる存在。自分を仲間と認めてくれる存在。私が求められる場所。あふれそうになる涙をこらえて大きな声と笑顔で

「うん」

そう、答える。

はしゃぎ回り、鬼から逃げる鬼たち。鬼を追いかける鬼たち。ただはしゃぎ回っている様にも見え、実際ルールはよくわからないけれど、それでも楽しかった。

いつもと違うスピードで通り過ぎる景色。

どれもが初めてでどれもがきれい。大きな景色の中に埋もれる鬼たちや自分はなんてちっぽけなんだろうか。だけど、それでも、いやだからこそ愛しく感じた。

景色の中で小さな小さな大きさの、鬼や自分。些細なことですべて忘れてしまいそうなそんな存在だからこそ、目に映る全てが美しく繊細、だから愛しい。

そして何よりも走れる自分に追いかける、追いかけられる楽しさ。

背中ばかりじゃない。走れば追い越すことだって今の私にはでき

るんだ。

それからの毎日は、現実と鬼の場所、二つを行き来して過ごした。学校から終われば急いで鬼の場所に行き、そして日が暮れ始めると家に帰る。

家に帰る私を鬼たちはいつも心配そうにしていたけれど、その分また同じ時間に顔を出すと本当に本当に嬉しそうに笑って、そして楽しそうに駆け回った。

煩い現実、煩い教室だってもう特に気にならない。そんな時間よりも鬼たちの時間が何よりも楽しみで、そればかりを考えていたのだから。

早く終わればいい。

早く学校なんかなくなればいい。そしたら鬼たちと遊べるのに。「美夏、最近なんか疲れていないか？」

いつの間にか教室にやって来た大澤に声をかけられて振り向くと、大澤はいつもに増して心配そうな表情で私の顔を覗き込んだ。

何が疲れているのか。こんなにも楽しくてこんなにも調子がいいのに。毎日毎日駆け回っても胸の苦しささえ感じない。だからこそ学校内ではそれが楽しみで前以上に自分の机から必要以上に動くことなく、放課後だけを楽しみに過ごしているのに。

大澤の顔を見て、ふ、と笑った。笑ったというよりも、心配しすぎる大澤を馬鹿にしたという方があっているかもしれない。

「何もないよ？ むしろ元気なくらい」

「でも……」

「何でもない。私はもう大丈夫だから、そんなに私に構わなくても大丈夫だから」

大澤の言葉を遮って、また視線を外に移した。雨は降っていないけれど曇った空は、厚く厚く青空を隠しているみたい。

「でも美夏……」

「まーまー大澤、しつこすぎると嫌われちゃうよ？ 大丈夫だって言ってるんだし」

まだ何かを言わんとする大澤の言葉を次に遮ったのはクラスメイトの女の子。

その声に少しだけ、また視線を教室の中に戻した。クラスメイトの言葉に大澤は諦めた様に、私を見て「無理はするなよ？」そうつぶやいてため息をつきながら教室を後にした。

呆れられた……みたいに感じる背中。

遅かれ早かれそうなるんだから。

少し感じる胸の痛みをごまかすようにそう思って目を閉じた。

何度も見たような後ろ姿。ゆっくりと私から離れて行くその姿に、わずかに心が痛むけれど……その痛みにはもう慣れてる。もう忘れた痛みのはず。諦めたはずのこと。

「美夏ちゃん、今日暇じゃないの？」

一瞬自分の名前を呼ばれたにも関わらず、自分に言っている台詞なのかと信じられなくて一気に思考が停止。

「え？」

「今日せっかくだしどこか一緒に行かない？ いつもまつすぐ帰っているから……用があるならいいんだけど……ほら、あんまり話したことないし」

目の前の女の子はにこにここと笑いながら私を誘う。

こんなこと……いつぶりだろうか。こんな言葉、ここ数年聞いた覚えなんかない。心臓がどくどくと脈打つその理由は何だろうか。

「大澤とのことも、聞き出したいしねーあんなに心配されるなんてやっぱり何かあるんじゃないのー？ みんなでカラオケでも行って本音ぶちまけようよー」

……それが目的？

女の子の言葉に頭はすつと冷静さを取り戻した。

そんなことないかもしれないけれど、だけど……自虐的に考えて

しまつのはきつともう癖。

カラオケなんて行つたつて歌えるはずないじゃない。
何もかも諦めたのはいつからだっただろうか。

どうせ私が倒れたら置いて行くくせに。

誰もを信用しなくなつてしまつた心はもう、手遅れ。

「悪いけど……用事があるから」

そういつて、ふいつとクラスメイトから視線をそらした。

「そっかー」そう残念そうに返事をしてクラスメイトはまた友達
とはしゃぎ笑い始めた。

残念そうにしてたつて残念なんかじゃないくせに。

机の上のせたままの手に力がこもり、爪が手の平に食い込んで
痛みを感じても、それ以上に痛む胸をごまかす様にもつともつと強
く手を握りしめた。

早く、早く鬼たちのところに行きたい。こんな場所じゃない、こ
んな現実のない夢のような場所に行きたい。

そればかりを考えながら、雲に覆われた薄暗い空を眺めた。

鬼のように

それから私の毎日は変わらない。

学校には行くものの、ただ放課後だけを楽しみに過ごす。もう鬼の場所と行き来をし始めてから何日が経っただろう。

「ねえ、なんでいつも鬼ごっこなの？」

さすがに鬼ごっこにも飽きて来た。そもそもルールも曖昧なままで走っているだけ。もっとほかにいろんな遊びがあるだろうに、どうしてこの鬼たちは鬼ごっこばかりを繰り返すのか。

「鬼だからだ、鬼だから」

そうだけど……。

思わず突っ込みたくなる単純な理由。

鬼だから鬼ごっこって理由になっっているのかいないのかもわからない。鬼ごっこをするにしてもいろんな鬼ごっこがあるって言うのに。

鬼たちのする鬼ごっこは、私の知っているものとは微妙に違った。追われているのか追いかけているのが曖昧。誰が鬼かもわからないまま走り回るだけ。そんなルールではさすがに走ることも楽しかったけど……やっぱり面白くない、というか飽きる。

「じゃあ違う鬼ごっこしようよ。色鬼とか、影鬼とか……」

「何だそれ、何だそれ」

私の提案に、鬼たちは一気に私の元に集まって来た。もしかしたら違う遊びができるかも。そう期待を込めてとりあえず影鬼のルールを説明する。

「なんでだ？　なんで鬼なのに逃げるんだ」

「だからこういうルールなんだって」

意味が分からないと口々に「なんで？」を繰り返す鬼たちに何度も説明するが、何度伝えても鬼たちは皆そろって首を傾げた。

「だって鬼だ。みんな鬼だ。鬼以外がないじゃないか。お前も鬼

だろう？ 鬼だろう？」

わかるけど……そうじゃないのに。

何度も、これ以上はないほど丁寧に説明をしているのにわかってくれない鬼にはあつとため息を漏らしては諦めた。きりがない……わかる気配もない。

「鬼ごっこしよう！ 鬼ごっこしよう！」

ルールのない鬼ごっこばかり。走るのもめんどくさくなってしまふ。ただど追いかけてくる鬼たちにせつかくだし……そう思いながら走る。ただ、走るだけ。

鬼ごっこってこんなだったけ？

自分だけがわからない。自分だけが楽しめない。走りながら見渡せば、鬼たちは楽しそうに走っている。その様子に似合わない自分の気持ちに、いらだちを感じる。

私だけが……わからないみたいで。

私だけが……取り残されているみたいで。

相変わらず学校は煩くて、その中でいつもの様に窓の外を眺めていた。

ここ最近では動かなければいけないときでも動くのが面倒。外ではあんなにも動けるのに、現実では不自由な自分の体。

ただどここまで動くことがしんどかったらどうか、と考えるときもあつたが、そんなことを考えるのすらも面倒に思えてしまう。

「美夏、お前毎日何やっているんだよ」

ああ、またか、そう思いながら振り向いた瞬間に顔を大澤にがしつと両手で掴まれた。

「……なに……」

顔に触れるぬくもりに、目を大きく見開いて動きが止まった。顔に触れられただけじゃない。目の前に見える大澤の表情が、あ

まりにも辛そうに私を睨んでいたから。

「お前、自分の顔鏡で見たか？　ちゃんと自分を見てるのか？」
何を怒っているんだろう。

『顔色が悪い』とここ最近母親にも何度も言われた言葉だけど…
…そういえば最近鏡を見たかな。お風呂にも入っているのに、顔も
毎朝洗っている。歯磨きだってしている。その場所には鏡は必ず目
の前にあるのに見た記憶がない。

「鏡持つてるか?!」

何も言えないままの私の顔を掴んだまま、大澤は目の前にいたク
ラスメイトに怒った様に言った。

いつもは煩いクラスメイトも、珍しく大澤が怒っている姿に何も
言わずに鞆からカラフルな鏡を取り出した。

「この顔をちゃんと見ろ！　お前自分がどんな顔色しているのかわ
かっているのか!？」

大声で叫びながら大澤は、私にクラスメイトに借りた鏡を突きつ
けた。私にちゃんと自分の顔が見える様にして。

「……な、に……これ」

鏡に映る自分の姿を見つめる。目の前に映る自分の姿。久々に見
ただろう自分の姿、いや、自分の顔。

「こんなに青い顔して元気なわけねえだろうが!」

血の気のない、青白い肌の色の自分の姿は、まるで……　鬼の
よう。

あんなにも青黒くはない。

だけど目の前の自分の肌は健康な人の色とは明らかに違う。倒れ
そうなほど青いわけでもない。不自然な青白さ。

「違う、違う違う違う」

だって自分は元気なはずでしょ。

ここでは走れないけれど、ただどあの場所に行けば私は走り回れ

るんだから。誰にも追いつけなかった自分じゃない。誰からも追いかけれなかった自分じゃない。

「倒れてからじゃ遅いんだぞ?!」

「違う!!」

大澤の言葉に、精一杯の拒否をして振り払った手は、目の前の鏡にあたった。

教室内に、鏡が割れる音が響き渡り、煩かった教室が一気に静寂に包まれる。

誰の声も聞こえない。何一つ響かない教室。

ただ両手両腕で必死で自分の顔を隠した。誰にも見られない様に、そして自分でも見えない様に。

見たくない。見たくない。こんな顔。見られたくない。こんな顔。
「美夏」

静寂を破ったのは大澤の声。さっきまでの声と違って悲しそうに私の手に触れながら言う。

「どうしたんだ?」

もうやめて!構わないで……!

「煩い!煩い煩い煩い!! どっか行って! こんな世界大嫌い

!大澤も嫌い! 消えてよ! 私の前からみんな消えて!

そしたら ……」

そしたら?

「美夏ちゃん……大丈夫?美夏ちゃん?」

黙ってみていたクラスメイトの女の子が優しく声をかけてくる。

「大澤も心配しているんだし……誰も美夏ちゃんを責めているわけじゃないし……そこまで言わなくてもさ……」

「煩い! 嘘つき! みんな嘘つきじゃない!

みんな私なんか放って行くくせに! 私のことなんかわからないんだって放っておいて! はじめから放っておいてよ!」

心配そうなふりして近づいてくるくせに、心の中で私のことを邪魔だとも思ってるくせに。

めんどくさくなったら何も言わずに去って行くくせに。逃げて行くくせに。

「なんでそんな……みんな美夏ちゃんのこと心配してるんじゃない」「それが大きなお世話よ……！」

パチつと小さな音が私の頬から響いて、微かな痛みを感じた。「美夏、いい加減にしろ」

大澤が私の頬に手を当てて言う。

そんなに力は感じなかったけれど……だけど痛む。大澤に叩かれた頬から全身が痛む。

何で？ なんでよ。

痛いわけじゃない。そんなに強い力で叩かれてなんかない。

なのにこぼれ落ちる涙。

こんなところで泣きたくない。もう泣きたくない。哀れみなんか感じたくないのに、なのに止まらない涙が目からばたばたとこぼれる。

「大澤……」

さすがに女の子に手を挙げた、という事実にはクラスメイトが戸惑いながら大澤に声をかけるけど、大澤は私をじっと見つめたまま……私から視線を移さなかった。

けれどそれすら苦痛。大澤の視線も、クラスメイトの視線も。

「やめて、もういい。もういらない。こんなのいらない！」

これ以上私に構わないで！ 私なんかこんな場所にいてたつて無意味でしょ？ 私に同情して声をかけて来たつて離れて行くのはそっちなんだから！」

そういつて鞆も持たずに大澤から逃げ出す様に教室を走って出て行った。

逃げ出す様に、じゃない。

逃げたんだ。

「来たぞー、来たぞー」

教室から走ってしまい、苦しく倒れそうだった体は鬼の元に来る間に治った。けれど、どこか重たい自分の体。

「鬼だー鬼が来るぞー」

私の姿を見つけると鬼たちは私を引いてまた走り始めた。

何を追いかけているの？

想いは募るばかり。自分は何がしたかったのかもわからない。走りたかっただけ？ 走り回りたかっただけ？

違う。

何かが違うと感じながら、鬼の手に引かれて走る。誰が鬼なのかわからないまま。

ここにいるのはみんな鬼。みんな鬼だから、みんな追いかける。

じゃあ何を追いかけるの？ 追いかけるものがない鬼ごっこ。私がつつと追いかけていたものは？ 今までずっとずっと望んでいたものは？

「鬼じゃない」

鬼の手を振り払って足を止めた。

大澤の顔が、怒ったような悲しそうなそんな顔が頭から離れない。クラスメイトの戸惑いの顔が忘れられない。

「私は鬼になんかなりたくない」

ここに来てから青くなり始めた自分の頬に触れて、とれるはずもないのに色をこすり落とす様に両手で何度も何度も痛みを感じるほどにこすった。

嫌だ。嫌だこんなの。こんな自分も嫌。

「どうした？ どうした？」

「鬼だろ？ 鬼だ」

「…違う。違う。」

私は鬼なんかじゃないし、鬼になんかなりたくない……！」
立ち止まる鬼たちはみんな顔を見合わせて口々に何かを言う。
だけどそんなのどうでもいい。

だって違うじゃない。一緒になりたいわけじゃない。鬼になりた
かったわけじゃない。

「鬼じゃない、人間よ！ もう鬼にはならない……！」

望んでいたものは違ったんだ。

そう思っ止めた足を変える方向に向けた。わからないけど

…帰らなきゃ。

「鬼じゃない、ニンゲン。鬼じゃない」

「鬼じゃないなら、鬼は追いかけてなくちゃ。追いかけてなくちゃ」

「鬼だからな」

背を向けたとき、聞こえて来た鬼たちの言葉に、歩き始めようと
して一歩目で止まった。

追いかける？

鬼じゃない私に、鬼の彼ら。

彼らがして来たのはいつも鬼ごっこ。追いかけるものがない鬼
ごっこ。だって彼らは鬼だから追いかけることしかできなかった。

じゃあ、鬼以外は？そのとき鬼は？

嫌な予感が思考を駆け巡り、ゆっくりと振り返った。

まさか……

私の背後の鬼たちは、出会ったときに見せた金棒を取り出してみ
んなが私に向けていた。

元々尖っていた爪はよりいっそう長く尖り、大きな黒目は細く細
くなって、見るからにつり上がる。

一気に血の気が引くのを感じた。

「鬼が来たぞ、鬼が来たぞ」

彼らのこの言葉は、『逃げるもの』への合図だったんだ。

逃げないと……！

バツと背を向けて走り始めた。変える方向に向かって。現実に向かつて。

恐怖が私の体を支配してうまくは走れない。足がもつれて何度も何度も転けそうになる。だけど逃げなくちゃ……！

草むらを掻き分けながら時々振り返る先には、鬼たちが金棒を振り上げながら私を追う姿。いつこうに縮まらない距離。常に聞こえてくる足音。私を追う、足音。

鬼たちは鬼。鬼でしかない。鬼でない私をただ追いかける『鬼ごっこ』。追いかけて追いかけて、追いかけるものたちのいなかった鬼たちは、追いかけるものを見つけたときに追いかける。

捕まったら、どうなるの？

誰も知らない鬼ごっこ。

違う違う……！　こんなの……！

違う……私と一緒に、私と一緒にの鬼たち。

だけど違う！　私は鬼じゃない！

次第に苦しくなり始める体に必死で耐えながら、時々振り返る先には相変わらず鬼たちが金棒を振りかぶりながら追いかけて来ている。

何で!?

もう私の体はいつもの大きさになっていないはず。景色はいつもの見慣れた景色。

だけど鬼たちは私と同じ大きさのまま。

なんで!?!　なんで一緒なの？

走りながら考えたけれど、それ以上に苦しすぎる体が頭までは働

かせてくれなくて、わかるのは、ただ逃げなきゃいけないこと。逃げないと。逃げないと。

「かつ……は……」

息苦しさに、足が言うことをきかない。いつもならもう抜け出してもいい頃なのに、草むらはどこまでもどこまでも続く。

ぐらりと傾いた体を、なんとか立て直したときには鬼がすぐ後ろまで来ていて慌てて傍の草の影に身を隠した。

「どこだ、どこだ」

私の姿を見失った鬼たちの声が背後で聞こえる。

口に手を当てて、しゃがみ込みじつと息を止めて、見つからないことを願った。どくどくと血液が体内で勢いよく流れる。その音が体中に響き、外で私を追う鬼にも聞こえているようだった。

??？お願い。

「どこいった、どこいった」

??？このままどこかに行つて！

「いるか？ いるか？」

目をぎゅっと閉じて祈る。そして、足音が遠くに去り、声も聞こえなくなつて、はあっと止めていた息を吐き出した。

「みいつけた」

顔の傍に後ろから私のぞき込む鬼の音が、響いた。

そのまま肩をしつかりと捕まれ、逃げ出せないようにと捕まれたその肩に鬼の爪がぎりつと食い込む。

「いつ……!」

息苦しさと痛みで顔が歪む。捕まった獲物を、強い力で掴まれる肩。

「お前は鬼か？ 違うのか？」

私は鬼？ それとも人？

気がつけば多くの鬼に囲まれた状況。逃げ出せない状況を私に感

じさせた。なぜだか……目の前の鬼の、私を拒絶するような瞳が自分に重なって見えた。

鬼、だったのかもしれない。

涙がいつきに溢れ出して、止まらない。

悲しい目が私をとらえて離さない。

ひとりぼっちの鬼。

一人じゃできないのに一人だけの殻に閉じこもって、終わることのない鬼ごっこをしていた馬鹿で孤独な鬼。鬼になってしまったほうが楽に違いない。このまま捕まって鬼になればいいのかもしれない。

鬼に捕まったら、鬼になるんだ。

だけど??…目に浮かぶ友達の背中。

胸が痛む。違うんだ。違うんだ。私は??…

「鬼じゃない!!」

叫んだ瞬間に、ふっと体が何かに引っ張られるように傾き、私の視界が草むらから空に変わった。

曇りの空。

だけど雲はそう厚くはないみたいだ。

ぐらりと傾いた体はそのまま道に投げ出された。

一面の空が、私を見下ろしていて…その空を仰ぎながら、私は意識を失った。

君のように

目の前が黒い。そんな色を感じた。
重たさを感じる瞼をゆつくりと開くと、視点が定まらない私の視
界には真つ白な世界が映し出される。

…どこ？

そう思つてすぐに、はっきり始めた意識が家の天井だと察知し
た。私の部屋の天井だ。いつもの場所。

「起きたか！？」

突然の、聞こえるはずのない声にびくりと体を震わせると、その
声の主は私の顔を覗き込む。

「お、おさわ……？」

なんでここに？

目の前の大澤は私の声に動きを止めたあと、「はああああああ
と大げさなため息をついた。

なんでため息をつかれないといけないんだ。そう思いながらぐつ
と肘に力を入れて上半身を起こした。まだ頭がくらくらするのは寝
起きだから？ 体がだるい。

「なんでここにいるの？」

何か言いたげな大澤の表情を見て、考えるよりも先にそう言葉を
発した。大澤が、という気持ちもあつたけれどそれ以上に自分が。

鬼に追われていたのに。

あの鬼たちの表情を思い出すだけでぶるつと体が震え始める。

「道ばたで、倒れてたんだよ、お前。そんなお前を見たら目を覚ま
すか不安になるだろう」

その言葉になんだか違和感を感じて窓に目をやると、空が見えた。
青い空。くすんだ水色の空。

「お前二日間眠りっぱなしだったんだぞ？」

「そっか……」

驚きがないと言っわけでもないけれど、だけど『二日間眠っていた』ということにそれほど驚くことはなかった。なんだろう……そのくらいで済んでよかったとも思える。

無言のまま部屋の中で数分を過ごした。大澤は私をじっと見つけたままでなんだか監視されているみたい。

本当は……大澤が帰ったら行こうと思っただけれど、このままじゃ帰らなさそうだ。

ふうつと小さくため息をついて大澤に告げた。

「外、行きたい」

別に鬼たちのところに行こうって言うわけじゃない。

ただ空の下に行きたかった。

外に行く私を心配しつつも大澤は了解してくれて、母は心配はしていたけれど昔から知っている大澤がいれば大丈夫かと、大澤に「よろしくね」と何度もいいながら手を握った。相当心配をかけてしまったことに胸が痛む。

家の近くの公園に二人でのんびり、何を話すわけでもなくただ歩いた。三時過ぎの公園には子供たちが砂場やブランコで遊ぶ姿が見える。

「鬼ごっこか」

そうつぶやいた大澤の声に、大澤の向ける視線の方向を私もみつめた。

目隠しをして数秒数える子供の周りを、一緒に遊んでいるだろう子供たちが駆け回る。追いかけて、追いかけて追いかける。

周りは間違いなく騒がしいはずなのに、私と大澤の間に流れる音はとても静かだった。

「鬼ごっこしてた」

「は？」

私の言葉に大澤が振り返った。何を言い出したんだと思っているだろう。自分でも思う。だけどどうしようもなく、誰かに言いたい気持ちになったんだ。

「鬼たちと遊んでた。楽しかった。走っても走っても疲れないの。楽しかった。今までで一番楽しい時間で楽しい場所だった」

思い切り走ったら前を走る鬼たちを追い越せるんだよ。背中ばかりじゃない。

「鬼ってどんなのか知ってる？」

大澤の方に振り返ってつぶやくと、大澤は何も言わなくて、ただ私は言葉を続けた。

「優しくて、繊細で、昔話に出てくるような鬼じゃないんだよ」

優しいからこそ、私を受け入れてくれて、繊細だからこそ私が帰るときには悲しそうな顔をした。そしてなにより……。

「悲しい鬼なんだ」

鬼以外のない世界で、鬼だけを見て、何かを求めながら走り回る。悲しいからこそ私を 追いかけたんだよね？

答えは多分鬼たちから聞くことはもう二度とないけれど。

怖くて怖くて血の気が引くほどの恐怖の中逃げて来たのに、私はあの鬼たちをやっぱり愛しく思う。

「美夏は、自分で思っているほど一人じゃないよ？」

大澤の言葉に、感情が高ぶったわけでもない。なのに、ぽろぽろと涙が落ちた。

「私、も鬼だったんだよ」

あの鬼たちを見て思った。私と一緒になんだと思った。だから私に鬼は見えたし、鬼にも私が見えたんじゃないかと思う。

姿の見えない何かを求めて一人追いかけていた。何かが何かわか

らないままもがく様に追いかけるだけの鬼だった。

幼い頃、姿を見つけては走って行ってしまふ友達の背中。すぐに見失ってひとりぼっちだった鬼。

本当に望んだことは……ただ、追いつくほどに走りたかった。

すぐに倒れてしまつて次第に誘つてくれなくなるのが辛く、悲しかった。走り回るみんなと一緒に駆け回りたいかった。

だから、晴れの日なんか嫌い。

雨が降ってみんなみんな、自分と同じ様に走れなければいいのにと思う様になつた私。

求めるのは諦めた。私のことを無視して遊び回る友達なんかいない。大嫌い。

だけど一番嫌いなのはそれができない自分。それができないのは自分のくせに人を嫌って拒絶しなければ悲しさでつぶれてしまいそうだった弱い自分。

『待つて、待つて、置いて行かないで』

一緒に走りたいんだ。置いて行かないで待つていてほしいんだ。

追いかけるのは自分だけ。

子になつたつてすぐに捕まつて鬼になつて、そしたら誰にも触れられない。

本当に望んだのは誰かを求めてただ追いかける鬼じゃなく、鬼の様に、逃げ回る子のように何かを求めて追いかけて、そして追いかけられたかった。

求めて求められたかった。

諦めた遊び。

雨を望んだ日々。

一人に慣れようとした時間。

追いかけるだけの鬼の私。

「俺は、お前が本当は寂しがりなことを知ってるよ？」

一緒に遊びたくて遊びたくて、しんどいのに無理するお前を知ってる。だから今、寂しいことも、無理して我慢していると俺にはわかるんだよ。

一緒に遊ばなくても今でも俺とは一緒にいるじゃねえか。無理する必要はないんだよ。走ることを我慢してるんだから、ほかのことまで我慢する必要なんてねーよ」

ねえ、ホントに？

もう私の視界には涙で何も見えなくなつて、言葉ものどにつまつてしまつて何も言えなかつた。

「鬼がいなけりや俺たちだつて遊べない。美夏がいたから、あの頃俺らは遊べたんだ。美夏は鬼じゃない。ただ、鬼ごっこをしていたんだから。みんなでやるから鬼ごっこだろ？」

鬼ごっこができないと思うなら、それが辛いのなら違うことをしたらいい。寂しいなら寂しいって言えばいい。お前の体をいやがる奴だつているかもしれない。だけどそんなこと何も気にしない奴が、俺みたいな奴はたくさんいるよ。

クラスの女も美夏のこと心配してた」

いつもいつも私を心配してくれる大澤。多くの友達に囲まれて、いつも笑顔の大澤。

なんで私に構うのかと邪魔に思っていたけれど、それでもきつとたくさん救ってくれた。

一つ一つは思い出せないけれど……だけど間違いなく大澤は私のそばにいてくれた。

「大澤つてホントに、変わってるね」

私なんかを見捨てないで、背を向けしないで、むしろ追いかけて来てくれる人。

「俺がいなかったら、お前、道ばたで何回倒れてると思ってるんだ

「よ

そういつて自慢げに笑った。

いつもいつも嫌いだったよ。

いつもいつも憎らしかった。

羨ましくて、惨めになるほど煩わしくて、
だけど助けられた。

君のようになりたかった。

陽のよじり

「今、空は晴れてるか？」

公園からの帰り道、少し遠回りして歩く。

大澤の声に何も言わずに空を仰ぐとまだ雨が降りそうな、水色とも灰色とも言えない色が塗りたくられている。

どうみたって晴れではないと思うけど……なんでそんなことを？

「こんな天気より俺は晴れた方が好きだけど。重たい空だと何となく……気分も重たくならねえ？」

「まあ……」

そっぴいなながら、目の前の道に視線を移した。

この道をまっすぐに行けばあの鬼たちの場所に行ける。

雨の中泥だらけになって遊んだあの日々。雨だったけれど……だけれど気分は晴れていた。

「だけどこんな天気も楽しめば晴れと何ら変わらない気がするんだよな」

雨も楽しめば楽しい。

鬼ごっこだけじゃなくても違ったことをすればいい。

あの日、あのとき、私の目の前の世界がきらきらと輝いたのはきつと、晴れだとか雨だとかそんなことじゃなくて……

「そっぴかもね」

楽しかったから。笑っていたから。私がそっぴ答えると大澤は嬉しそうに笑った。

明日、教室に入ったら『おはよう』って言ってみよう。
この間はクラスメイトの誘いを断ったから、明日は私が誘ってみよう。
そして……。

大澤を見習って、陽のように、明るく笑ってみよう。

ひとりぼっちで求めることしかできない寂しい鬼の悲しい涙は…
…きつともう降らない。

…雲の隙間から陽が差して、くすんだ空を一気に輝かせた。

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7063u/>

鬼の落とした雨

2011年7月10日03時50分発行